

日本心理学会第84回大会 ポスター発表 PP-014(教育14)

大学生の友人関係形成期と関係維持期におけるFTFコミュニケーションとLINEコミュニケーション



大谷 宗啓¹・小長谷 柚里^{2#}

(滋賀大学¹・与謝野町役場^{2#})

<http://www.re2.sakura.ne.jp/ohtani/jp/index.html>

要約³

- 関係形成期・関係維持期とも、FTFコミュニケーション頻度は関係評価と関係満足度の高さを予測（維持期の重要度に対しては限定的）

➡ FTF重視の友人作り支援は妥当

- 但し、LINEコミュニケーション頻度も補完的効果をもつ

➡ FTF機会が限られる場合や、FTFが苦手な人にとって、LINEは有益な手段たり得る

FTFの方が効率的だが、それに拘り過ぎると損？

- 但し、形成期・維持期とも、FTFだけが関係満足度を予測

➡ LINEでFTFを代替することには限界(orリスク)がある

³ 発表登録後の再分析により、抄録集と内容が異なる部分があります。



問題と目的

新入生対象の様々な友人作り支援を多くの大学が実施(岡田他, 2015)

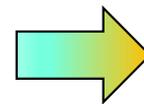
背景 (高下, 2011)

- 4月から7月にかけて家族や大学スタッフへの支援期待が低下
友人がサポート源として重要になる
- 7月時点で4人に1人が「疎外感を感じる」, 「なじめない」

⇒新入生が友人作りに躓くと,

大学不適応に陥る

相談先を失う(大学スタッフを頼って
くれれば良いが…頼ってもらえない)



退学の虞が高まってしまう

➡ 新入生の大学不適合・退学の防止策としての“友人作り支援”

…この場合、「親密な友人を作る」や「長く続く友人を作る」よりも

「早く友人を作る」 ことが優先目標

(ついつい、「親友」や「生涯の友」を優先させそうになりますが
……それは気長にじっくり作れば良いし、大学内でなくても良い)

FTFの促進を重視した支援実践が多く紹介(岡田他, 2015; 高下, 2011)

しかし、若い世代においてLINEはほとんど必須のもの(時岡他, 2017)

本研究の着想

…LINEでのコミュニケーションも考慮に入れる
必要があるのでは？

黒川他 (2015) の仮説 (仮説4・5の一部)

関係の初期段階(5月)においては、FTF コミュニケーション頻度、SNS コミュニケーション頻度は、友人関係満足感を予測する。関係が形成されてから(7月, 10月, 12月)は、FTFコミュニケーション頻度のみが友人関係満足感を予測する。

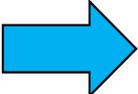
黒川他 (2015) の結果

- 時期を問わず、FTF頻度もSNS頻度も関係満足感を予測しない。
- 但し、FTF頻度の増加量は関係満足感を予測した。
- いつの時期においても友人関係には対面での相互作用が重要。

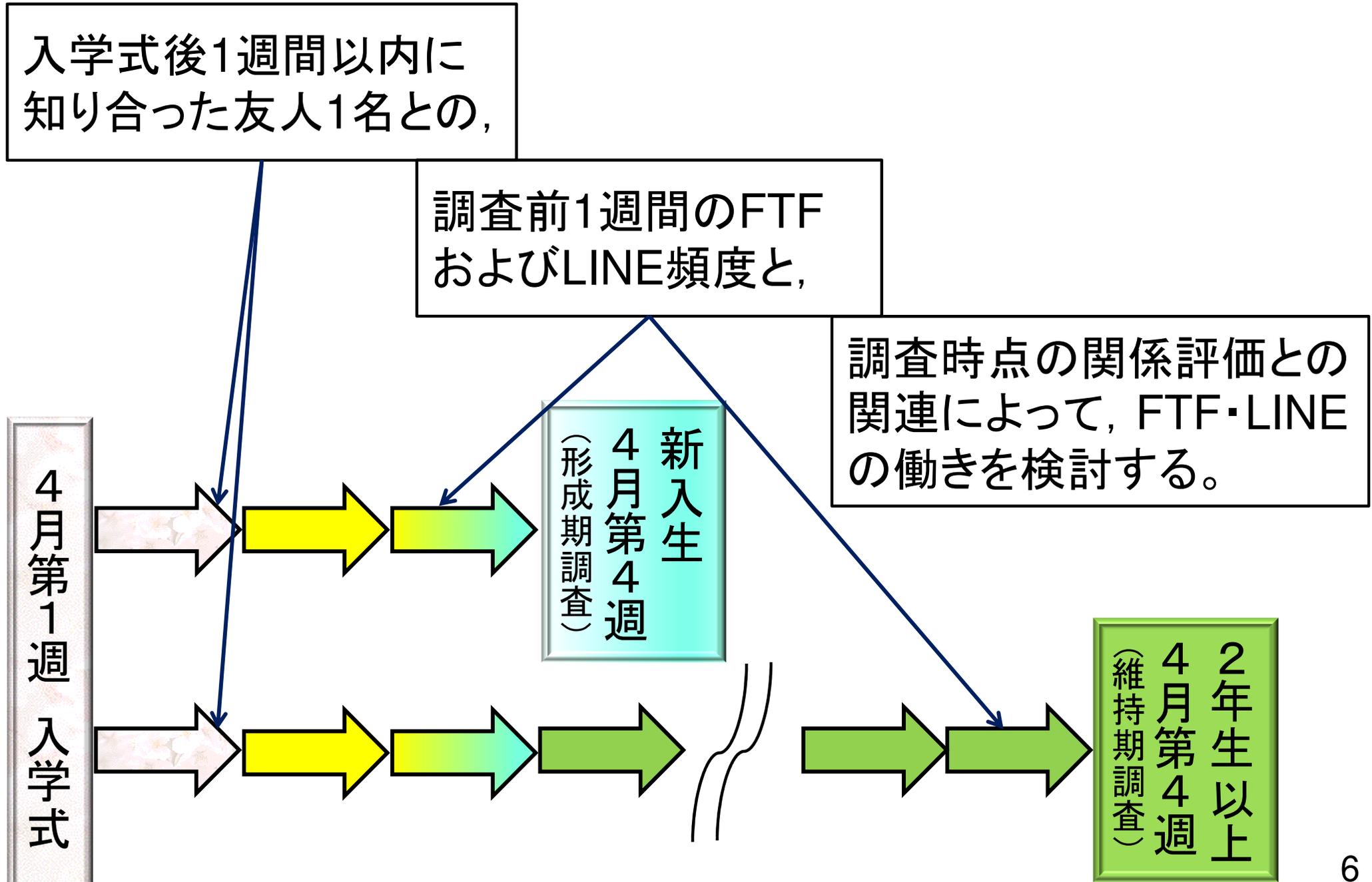
 この知見が友人作り支援に役立ちそう！

但し… {

- 「同じ専攻の友人」に入学以前からの友人はいないか？
- 関係の初期分化は出会って2週間で安定 (山中, 1994)

 5月の初回調査データは形成期と維持期が混ざっていないか？ 5

そこで…本研究のデザイン



説明変数と目的変数の工夫

- 「授業後に学食で集合」等の内容でもコミュニケーション頻度の測定値が上がる設問→関係満足を予測しにくかった？(黒川他, 2015)

➡ 古谷・坂田(2006)の尺度を用いて測定

課題的, 情緒的, コンサマトリー的な内容のコミュニケーションを測定する尺度

- 目標と実態のズレが関係満足度を規定(下斗米, 2000; 吉岡, 2001)

⇒関係満足度の高さは, 実態の良好さの表れかも知れないし,
目標の低さの表れかも知れない。

多くの場合は「どちらか」ではなく「双方の兼ね合い」。

⇒測定値の意味が多義的で解釈が難しいし, 目的変数としては感度が鈍いのではないかと考えられる。

➡ 関係満足度の他に, 親密度, 重要度, 親密化欲求も測定

方 法

調査方法 無記名式の質問紙調査

調査時期 2019年4月第4週

調査内容 入学式後1週間以内に知り合った友人1名を明確に想起
(知り合ったきっかけを記述)させた上で、以下を尋ねた。

【FTF頻度】想定した友人との過去1週間のFTF頻度について、コミュニケーション尺度9項目(古谷・坂田, 2006)…黒川他(2015)がSNSの設問で用いた「週1回以下」から「ほぼ毎日(頻繁)」の5件法

【LINE頻度】FTF頻度と同様の方法で測定

【友人関係満足度】友人関係満足度を尋ねる8項目(豊田, 2004; 池田他, 2013)…「まったくあてはまらない」から「とてもあてはまる」の5件法

【親密度】「今この時点では、想定した人物とはどの程度親しいと思いますか」……下斗米(2000)と池田他(2013)を参考に「ぜんぜん親しくない」から「とても親しい」の7件法

【重要度】「今この時点では、想定した人物はあなたの生活にとってどれくらい重要ですか」……上記の「親しい」を「重要」に変えた7件法

【親密化欲求】「想定した人物と親しくなっていきたいと思いますか」……「ぜんぜんそう思わない」から「とてもそう思う」の7件法

分析対象 関西地方の国立大学生438名

(男性183名, 女性252名, 他3名)

平均年齢19.22歳 ($SD = 1.24$)

形成期データ: 1年生201名

維持期データ: 2年生39名, 3年生190名, 4年生8名

LINEを使用していない者はいなかった

結果：まず各変数間の単相関を確認

Table 1
各変数間の単相関係数

	1 (<i>n</i> =237)	2 (<i>n</i> =237)	3 (<i>n</i> =237)	4 (<i>n</i> =236)	5 (<i>n</i> =237)	6 (<i>n</i> =197)
1. FTF頻度 (<i>n</i> =201)	-	.63 ***	.23 ***	.35 ***	.52 ***	.36 ***
2. LINE頻度 (<i>n</i> =201)	.60 ***	-	.12 †	.26 ***	.35 ***	.28 ***
3. 関係満足度 (<i>n</i> =201)	.26 ***	.23 ***	-	.43 ***	.37 ***	.42 ***
4. 親密度 (<i>n</i> =201)	.36 ***	.33 ***	.66 ***	-	.65 ***	.66 ***
5. 重要度 (<i>n</i> =201)	.50 ***	.34 ***	.44 ***	.56 ***	-	.64 ***
6. 親密化欲求 (<i>n</i> =127)	.36 ***	.24 **	.60 ***	.57 ***	.63 ***	-

注) 対角線の左側は関係形成期, 右側は関係維持期の結果を示す。

†*p* < .10, ** *p* < .01, *** *p* < .001

- FTFとLINEの関連の大きさに注意が必要
- やはり, FTF・LINEと関係満足度間の相関係数は小さめ

関係満足度

Table 2

関係満足度を目的変数とした階層的重回帰分析

説明変数	b^*	[95%CI]	VIF
(Step 1: 説明変数)			
時期dummy ^a	.14 *	[0.03, 0.25]	1.52
FTF	.25 ***	[0.12, 0.38]	1.96
LINE	.01	[-0.13, 0.16]	2.25
(Step 2: 1次の交互作用項)			
時期×FTF	.01	[-0.11, 0.14]	1.82
時期×LINE	-.09	[-0.23, 0.06]	2.19
FTF×LINE	.04	[-0.07, 0.15]	1.48
(Step 3: 2次の交互作用項)			
時期×FTF×LINE	.01	[-0.11, 0.14]	2.02
R^2	.07 ***		
n	438		

注) 表中にはSTEP 3の結果のみ示した。

^a 時期dummy (0 = 関係形成期, 1 = 関係維持期)

* $p < .05$, *** $p < .001$

- 有意な交互作用はなし
- 関係形成期よりも関係維持期の方が関係満足度が高い
関係満足度が高い関係の方が維持しやすい…と逆に考えれば, ごく常識的な結果
- FTFは常に有効(高い関係満足度を予測)

• 但し, 効果量は小さめ

親密度

Table 3

親密度を目的変数とした階層的重回帰分析

説明変数	b^*	[95%CI]	VIF
(Step 1: 説明変数)			
時期dummy ^a	.31 ***	[0.22, 0.40]	1.52
FTF	.26 ***	[0.16, 0.37]	1.97
LINE	.18 **	[0.07, 0.28]	2.25
(Step 2: 1次の交互作用項)			
時期×FTF	-.01	[-0.11, 0.09]	1.83
時期×LINE	-.02	[-0.13, 0.09]	2.19
FTF×LINE	-.11 *	[-0.21, -0.02]	1.48
(Step 3: 2次の交互作用項)			
時期×FTF×LINE	-.07	[-0.18, 0.03]	2.02
R^2	.17 ***		
n	437		

注) 表中にはSTEP 3の結果のみ示した。

^a 時期dummy (0 = 関係形成期, 1 = 関係維持期)

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

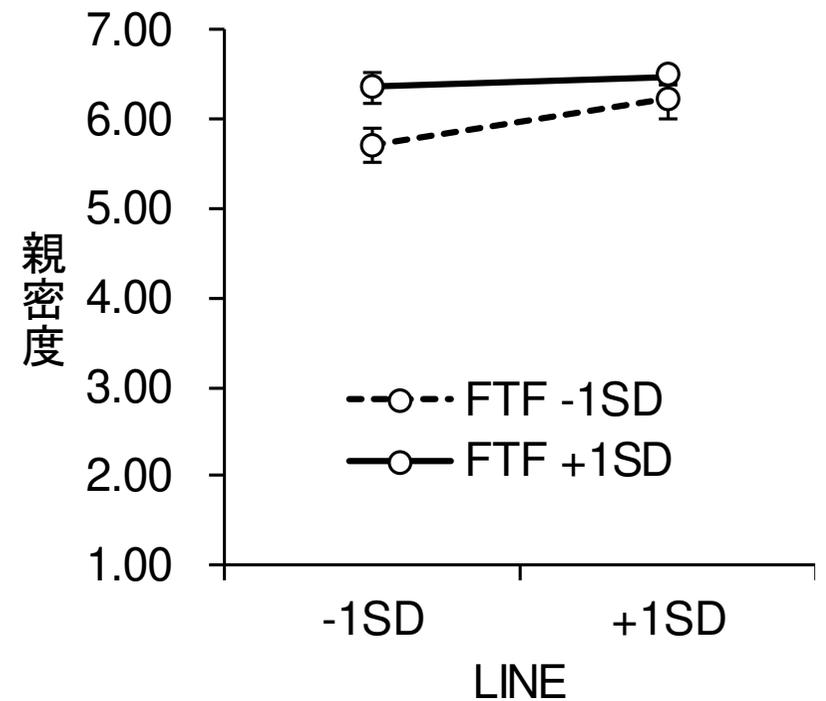


Figure 1. 親密度に対するFTF×LINEの交互作用(エラーバーは95%CI)。FTF: $b^* = .37$ ($p < .001$) at LINE -1SD, $b^* = .15$ ($p < .05$) at LINE +1SD。LINE: $b^* = .29$ ($p < .01$) at FTF -1SD, 他 *ns*。

- FTFは常に有効
- LINEは時期を問わず、FTF低頻度時に補完的効果を発揮

重要度

Table 4

重要度を目的変数とした階層的重回帰分析

説明変数	b^*	[95%CI]	VIF
(Step 1: 説明変数)			
時期dummy ^a	.09 *	[0.00, 0.17]	1.52
FTF	.45 ***	[0.34, 0.55]	1.96
LINE	.15 **	[0.05, 0.26]	2.25
(Step 2: 1次の交互作用項)			
時期×FTF	-.02	[-0.13, 0.08]	1.82
時期×LINE	.03	[-0.07, 0.13]	2.19
FTF×LINE	-.19 ***	[-0.28, -0.10]	1.48
(Step 3: 2次の交互作用項)			
時期×FTF×LINE	-.09 †	[-0.20, 0.01]	2.02
R^2	.31 ***		
n	438		

注) 表中にはSTEP 3の結果のみ示した。

^a 時期dummy (0 = 関係形成期, 1 = 関係維持期)

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

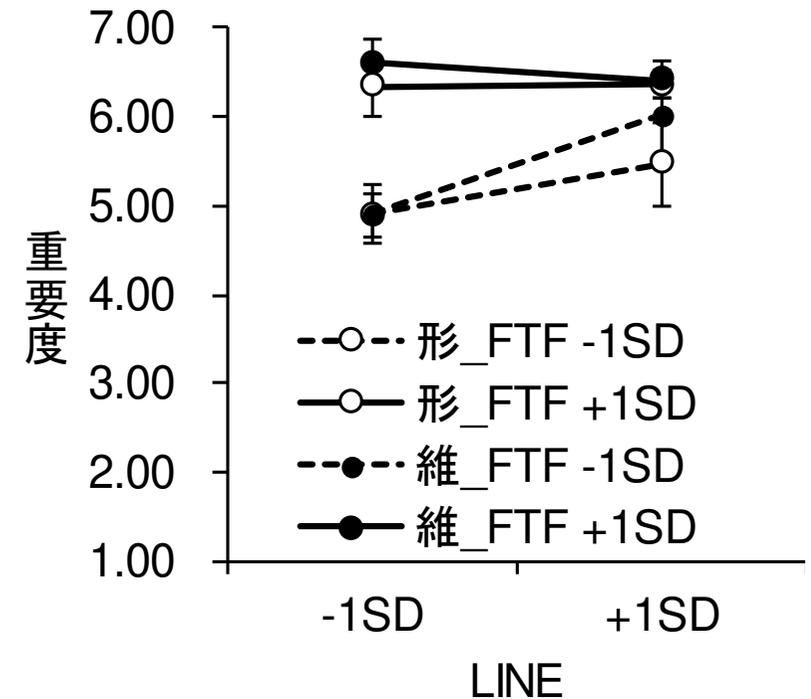


Figure 2. 重要度に対する時期×FTF×LINEの交互作用(エラーバーは95%CI)。「形」は関係形成期,「維」は関係維持期を示す。時期: $b^* = .22$ ($p < .10$) at FTF -1SD with LINE +1SD, 他 *ns*。FTF: $b^* = .58$ ($p < .001$) at 形 with LINE -1SD, $b^* = .36$ ($p < .001$) at 形 with LINE +1SD, $b^* = .69$ ($p < .001$) at 維 with LINE -1SD, 他 *ns*。LINE: $b^* = .23$ ($p < .05$) at 形 with FTF -1SD, $b^* = .45$ ($p < .001$) at 維 with FTF -1SD, 他 *ns*。

(細くなるため次のスライドと
合わせてご覧ください)

Table 4
重要度を目的変数とした階層的重回帰分析

説明変数	b^*	[95%CI]	VIF
(Step 1: 説明変数)			
時期dummy ^a	.09 *	[0.00, 0.17]	1.52
FTF	.45 ***	[0.34, 0.55]	1.96
LINE	.15 **	[0.05, 0.26]	2.25
(Step 2: 1次の交互作用項)			
時期×FTF	-.02	[-0.13, 0.08]	1.82
時期×LINE	.03	[-0.07, 0.13]	2.19
FTF×LINE	-.19 ***	[-0.28, -0.10]	1.48
(Step 3: 2次の交互作用項)			
時期×FTF×LINE	-.09 †	[-0.20, 0.01]	2.02
R^2	.31 ***		
n	438		

注) 表中にはSTEP 3の結果のみ示した。

^a 時期dummy (0 = 関係形成期, 1 = 関係維持期)

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

- FTF低頻度・LINE高頻度の組み合わせ時のみ, 形成期<維持期
- FTFは形成期において有効。維持期においてはLINE低頻度時に補完的効果を発揮
- LINEは時期を問わず, FTF低頻度時に補完的効果を発揮

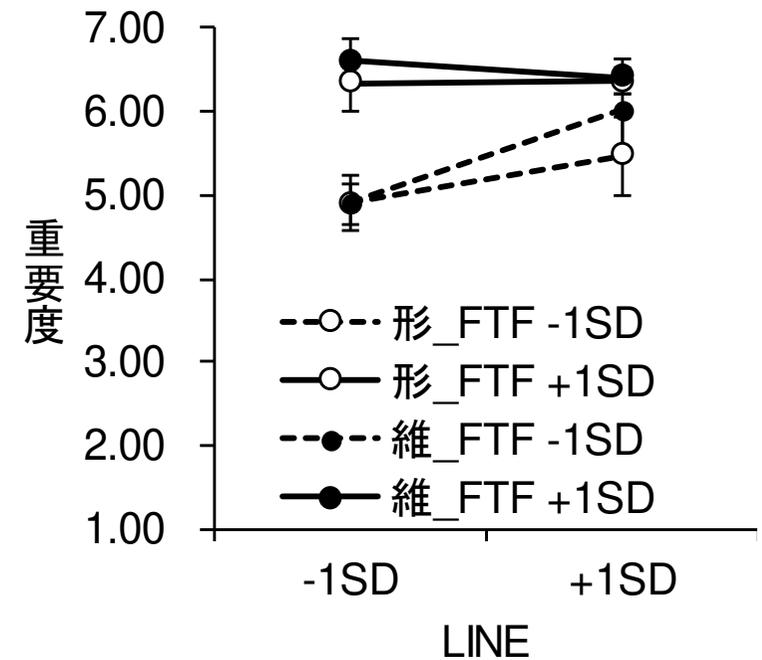


Figure 2. 重要度に対する時期×FTF×LINEの交互作用(エラーバーは95%CI)。「形」は関係形成期,「維」は関係維持期を示す。時期: $b^* = .22$ ($p < .10$) at FTF -1SD with LINE +1SD, 他 *ns*。FTF: $b^* = .58$ ($p < .001$) at 形 with LINE-1SD, $b^* = .36$ ($p < .001$) at 形 with LINE +1SD, $b^* = .69$ ($p < .001$) at 維 with LINE -1SD, 他 *ns*。LINE: $b^* = .23$ ($p < .05$) at 形 with FTF -1SD, $b^* = .45$ ($p < .001$) at 維 with FTF -1SD, 他 *ns*。

親密化欲求

Table 5

親密化欲求を目的変数とした階層的重回帰分析

説明変数	b^*	[95%CI]	VIF
(Step 1: 説明変数)			
時期dummy ^a	.05	[-0.07, 0.16]	1.56
FTF	.32 ***	[0.19, 0.45]	2.23
LINE	.12	[-0.04, 0.29]	2.57
(Step 2: 1次の交互作用項)			
時期×FTF	-.05	[-0.18, 0.07]	2.04
時期×LINE	.05	[-0.12, 0.21]	2.50
FTF×LINE	-.12 †	[-0.24, 0.01]	1.68
(Step 3: 2次の交互作用項)			
時期×FTF×LINE	-.06	[-0.20, 0.08]	2.24
R^2	.16 ***		
n	324		

注) 表中にはSTEP 3の結果のみ示した。

^a 時期dummy (0 = 関係形成期, 1 = 関係維持期)

† $p < .10$, *** $p < .001$

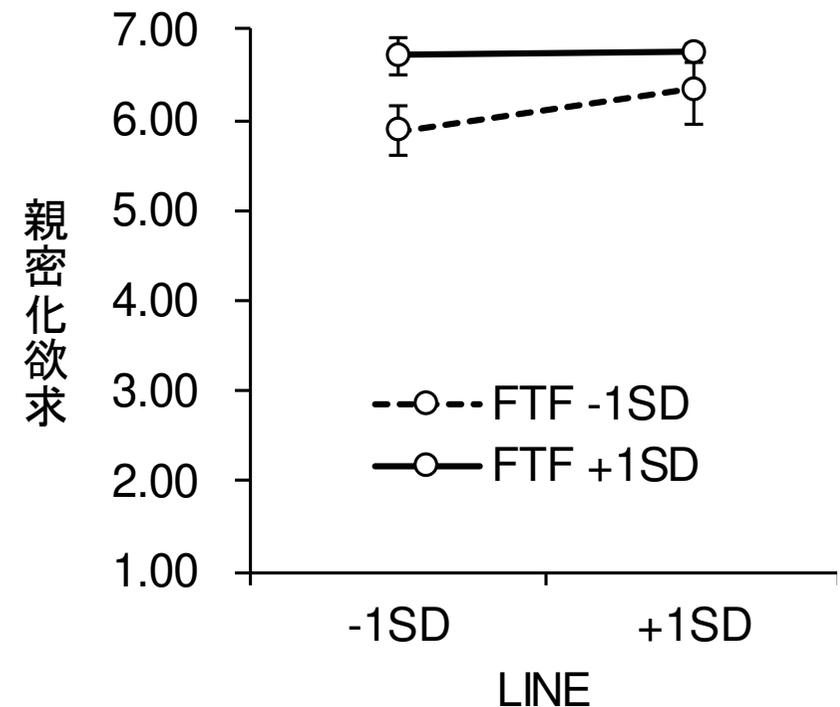


Figure 3. 親密化欲求に対するFTF×LINEの交互作用(エラーバーは95%CI)。FTF: $b^* = .43$ ($p < .001$) at LINE -1SD, $b^* = .21$ ($p < .05$) at LINE +1SD。LINE: $b^* = .24$ ($p < .10$) at FTF -1SD, 他 *ns*。

- FTFは常に有効
- LINEは時期を問わず, FTF低頻度時に補完的効果を発揮

総合考察

友人作り支援への示唆

- ほぼ全体を通して、FTFはLINEよりも優位性を示した
➡ FTF重視の友人作り支援は妥当
- 但し、LINEコミュニケーション頻度も補完的効果をもつ
➡ FTF機会が限られる場合や、FTFが苦手な人にとって、LINEは有益な手段たり得る

例えば…

通学時間が長い自宅生は、共に過ごす時間が少ないことで友人関係に乗り遅れてしまい孤独感を高める可能性
(佐藤・石井, 2019)

➡
このような場合、FTFに拘り過ぎず、LINEも活用した方がよい

そういう人の場合はともかく、「FTFが苦手な人」は
FTFの練習をする方が抜本的解決になるのでは？



新入生支援に関して言えば、それは後回し。まずは

「早く友人を作る」 ことが優先目標

FTFもLINEも不活発な人（相関係数を見る限り少なからず：see Table 1）
には難しい⇒目標の再設定が必要であろうけれども。

注意すべきは

LINEでは関係満足度が高まらないと考え
られる結果であったこと

“関係評価は高まるが、関係満足は高まらない”ことが
何をもたらすか？

“関係評価は高まるが、関係満足は高まらない”

その不均衡にどう対処するか？

➡ 充足行動が拡大・促進される…かも知れない

オンライン関係の33.3%はオフライン関係にも移行する (Parks, & Floyd, 1996)

FTFよりCMCの方が自己開示量が増える (e.g. 笠木・大坊, 2003; 杉谷, 2007)

➡ 関係の目標 (期待, 理想, 要求水準) を下げる…かも知れない

関係満足度は高まり, 均衡が得られる (…機会損失も大きいであろうが)

➡ 不均衡に耐え続ける…かも…いやそれはちょっと無理が…

それでは大学適応どころではなくなってしまう

➡ オフライン関係に移行するという, 単純で, 効果的で, 手っ取り早い対処が選択不能な場合, 他に適当な選択肢はあるか？

……それを考えておかないと危ういのではないか。

FTF制限下の対人コミュニケーションへの示唆

- COVID-19対策による、友人作りへの不安・不満の高まり(全国大学生活協同組合連合会広報調査部, 2020)
 - LINEやZoom等のCMCを用いた友人づくり支援が急速に広がる(広がっている)と考えられる

本研究の結果から考えると…

- ➡ CMCによるFTFの代替可能性は、先行研究で考えられていた以上にある。
- ➡ 但し、関係評価と関係満足の不均衡を生む可能性には要注意
関係の目標を下げたり、健康を損なったり…のみでなく、自己開示を過度に早めてトラブルや関係崩壊に繋がることも考えられる

本研究の学術的成果

- 説明変数・目的変数の工夫により、先行研究で棄却された仮説の一部が支持された
- FTFの優位性を引き続き支持しつつ、LINEの有効性も示した
- 関係形成期と関係維持期の違いは、ほとんど見られなかった
時期の絡む1次の交互作用が見られなかったので、FTFもLINEも、時期によって働きが変わる訳ではない？

本研究の限界

- 可能であれば縦断調査で検討すべき内容である
コミュニケーション行動と関係評価は循環的・相互的に影響し合うはず
- 関係形成に失敗したケースを扱えていない
学生支援のためにも、形成期・維持期の異同に迫るためにも有用な情報
但し大学適応に悪影響を与える虞があり、新入生に尋ねるのは×。

引用文献

- 古谷 嘉一郎・坂田 桐子 (2006). 対面, 携帯電話, 携帯メールでのコミュニケーションが友人との関係維持に及ぼす効果——コミュニケーションのメディアと内容の適合性に注目して—— 社会心理学研究, 22, 72-84.
- 池田 幸恭・葉山 大地・高坂 康雅・佐藤 有耕 (2013). 大学内の友人関係における親密さと共有様式との関係 青年心理学研究, 24, 111-124.
- 笠木 理史・大坊 郁夫 (2003). CMCと対面場面におけるコミュニケーション特徴に関する研究 対人社会心理学研究, 3, 93-101.
- 黒川 雅幸・吉武 久美・中山 真・三島 浩路・大西 彩子・吉田 俊和 (2015). 大学新入生の友人関係におけるFTFおよびSNSコミュニケーション 対人社会心理学研究, 15, 55-62.
- 岡田 努・小幡 富志男・阿藤 正道・西村 公雄・長岡 功・松本 顕 (2015). 特集 大学新入生の“トモダチ作り”を考える 大学時報, 362, 32-61.
- Parks, M. R., & Floyd, K. (1996). Making friends in cyberspace. *Journal of Communication*, 46, 80-97.
- 佐藤 有耕・石井 健太郎 (2019). 住居状況と友人関係からみた大学生の孤独感——大学新入生に注目して—— 日本教育心理学会第61回総会発表論文集, 213.
- 清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフトHAD——機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案—— メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.

- 下斗米 淳 (2000). 友人関係の親密化過程における満足・不満足感及び葛藤の顕在化に関する研究——役割期待と遂行とのズレからの検討—— 実験社会心理学研究, 40, 1-15.
- 杉谷 陽子 (2007). メールはなぜ「話しやすい」のか? ——CMC (Computer-Mediated Communication) における自己呈示効力感の上昇—— 社会心理学研究, 22, 234-244.
- 高下 梓 (2011). 大学新生生の適応感の変化——4月から7月にかけての初期適応過程—— 明星大学心理学年報, 29, 9-19.
- 時岡 良太・佐藤 映・児玉 夏枝・田附 紘平・竹中 悠香・松波 美里・岩井 有香・木村 大樹・鈴木 優佳・橋本 真友里・岩城 晶子・神代 末人・桑原 知子 (2017). 高校生のLINEでのやりとりに対する認知に現代青年の友人関係特徴が及ぼす影響 パーソナリティ研究, 26, 76-88.
- 豊田 瀬里乃 (2004). 対人関係上の信念の変化からみた友人関係の分析 平成15年度筑波大学人間学類卒業論文(未公刊).
- 山中 一英 (1994). 対人関係の親密化過程における関係性の初期分化現象に関する検討 実験社会心理学研究 34(2), 105-115.
- 吉岡 和子 (2001). 友人関係の理想と現実のズレ及び自己受容から捉えた友人関係の満足感 青年心理学研究, 13, 13-30.
- 全国大学生生活協同組合連合会広報調査部 (2020). 「緊急！大学生・院生向けアンケート」大学生結果速報

付記:本研究は、第2著者が第1著者の指導のもとで執筆した2019年度滋賀大学教育学部卒業論文の一部を再分析したものです。調査にご協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

